

豊かな発想を育むには

「議論の場」の大切さ

前田章雄
Maeda Akio



大学講義や学会講演等の機会に、エネルギーに関する話題提供を行っている。そうした活動を通して、聴講者の発言から学ぶことも多くある。私の経験をもとに、「議論の場」を活性化する豊かな発想が育まれるポイントについて述べてみたい。

エネルギー講義で心掛けていること

まずは、講義や講演活動での私のスタンスを述べておきたい。カーボンニュートラルの実現にむけた活動を推進しながらも、私たちは今まさに化石燃料に依存した生活を送っている。そこからどのように脱却するかが問われているわけではあるが、一足飛びに新しい生活パターンへ移れるもの

はない。現在の生活を守りながら、いかにスムーズに新しい未来を生み出していけるのか。「今日の安心を守り、未来の日常を創る」

新しい技術や取り組みを議論しながらも、足元の現実も決しておろそかにしてはいけない。そのためにも、エネルギー源の枠にとらわれない多角的な視点で考える必要性があると考えている。

多角的な視点のたとえでは、「虫の目」「鳥の目」「魚の目」が

有名だ(図1)。地面を這う虫のよ

うに生活者に寄り添った視点が、発想の原点になればならない。エネルギーが現実の世界で、どのような使われ方をしているのか。どのような課題をもっているのか。利用者の視点となる「虫の目」は必須だ。もちろん、虫にはアリもいればキリギリスもいて、多様な立場の人々が存在している。家庭用だけでなく業務用や産業用など、エネルギーの利用用途は幅広い。一方で、上空から全体を俯瞰する鳥のような高い視座がなければ、偏った意見に陥る可能性が生じるだろう。世界の情勢や経済とエネルギーを関連づけて考える必要がある。

最後に、まっすぐ前を向いて泳ぐ魚のように、過去から現在、そして未来を一本の線で見通すことによって得られるブレない考え方や同じ過ちを繰り返さぬような歴史を学び、歴史から未来を創造する力も必要だ。

こうした「虫の目」「鳥の目」「魚の目」が三位一体となりながら思考をより深めていく活動が何より大切なのではないかと考え、

その一助となるべく、多角的な視点で見た情報発信を心掛けている。

多様な意見が生まれる「議論の場」

さて、講義や講演を行うと、「どうすればカーボンニュートラルが実現するのか、答えが欲しい」といった要求をされることもある。高校までの授業では、正解がすでにある問題を答えてきたが、現実の社会においては、万人に共通する回答など最初から存在していない。単純に答えにたどり着くことはなく、複雑な要素を考慮して検討しなければいけない。

また、どのようなものにもメリットとデメリットが共存しているし、ある人にとってのメリットが別の人にとってのデメリットとなるとは限らない。それぞれが置かれた状況によって、多様なニーズが存在しているからだ。つまり、複数の手法をうまく組み合わせながら、状況に応じて変えるしかない。エネルギーの世界でも同じだ。ひとつの方策だけに頼ることなく、複数の手法を同時に進行させながら、

ら、組み合わせる必要がある。

情報の一側面をうのみにする怖さもある。たとえば、「水素は燃やしても水しか出ないのだから、すべてのエネルギーを水素に転換しよう」とか、「再生可能エネルギーが利用できるのだから、なんでもかんでも電気に変えよう」といった直線的な思考には、注意が必要だ。もちろん、水素利用や電化を否定するつもりはない。一部ではそうした方向にむかうだろうし、そうした方向にむかうべき分野も存在している。しかし、メ

リットとデメリットをキチンと把握しながら思考を巡らせると、向き不向きを考慮した複合的な発想が生まれてくるはずだ。

そこで、複合的な発想を生み出すために、「太陽光発電の欠点を挙げてみよう」というような、あえてマイナス面を討論する場を設定してみた。もちろん、「欠点があるからダメ」ということを言う合うのではなく、「欠点を課題と捉えて克服し、さらに普及させるためにみんなで考えよう」というスタンスの議論である。

この議論を行った場では、それぞれ異なる結果がみられた。たとえば、社会人大学での議論。会社役員や大学教授、自営業など、さまざまな経歴の人が集まっているだけあって、活発な発言が飛び交ったが、みな自分の意見を言うばかりで、まとめてみると常識的な内容に終始する傾向にある。つぎに、同じ会社のメンバーが集まった勉強会の場合。まず、手を挙げる人がほとんど出てこない。指名すると鋭い意見を発言されるので、さすがは現役の社会人だと感心するが、周りの目を気にする

態度や意見が多く、活発な議論になりにくかった。最後に、大学生の議論の場合。ほとんどの学生が「前の人と同じですが」と同じ回答を繰り返され、講義内容をなぞった意見ばかりが見られる。だが、そのなかには鋭い意見を言ってくれる人も現れた。「太陽光発電を普及させると、エネルギー資源を外国から買わなくてもよくなる。しかし、発電効率が低いことを考えると、大量の発電設備を導入しなければならぬ。つまり、鉄や銅やアルミ、そしてレアメタルなどの鉱物資源を大量に海外から購入する必要が生じる」

資源貧困である日本の海外依存に関わる意見は、鋭い慧眼と評したい。

発言した学生に対し、なぜこのような意見をもったのか尋ねてみると、初めからこうした意見をもっていたわけではなかった。ほかの学生たちの発言を聞きながら、考えが膨らんでいった結果だというのだ。専門的な知識や経験が乏しいと思える学生が、他者の発言をもとにユニークな意見を生み出

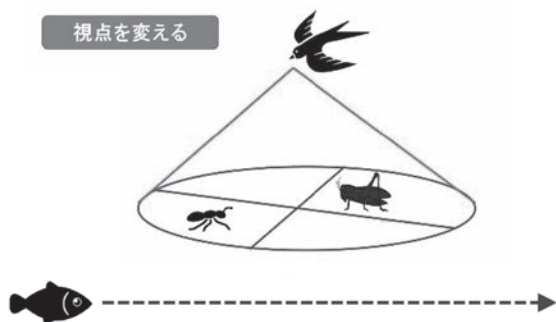
すことができた。これは、多様な意見が生まれる「議論の場」をつくるうえでヒントとなるものである。

「知識(情報)」と「知恵(新たな発想)」

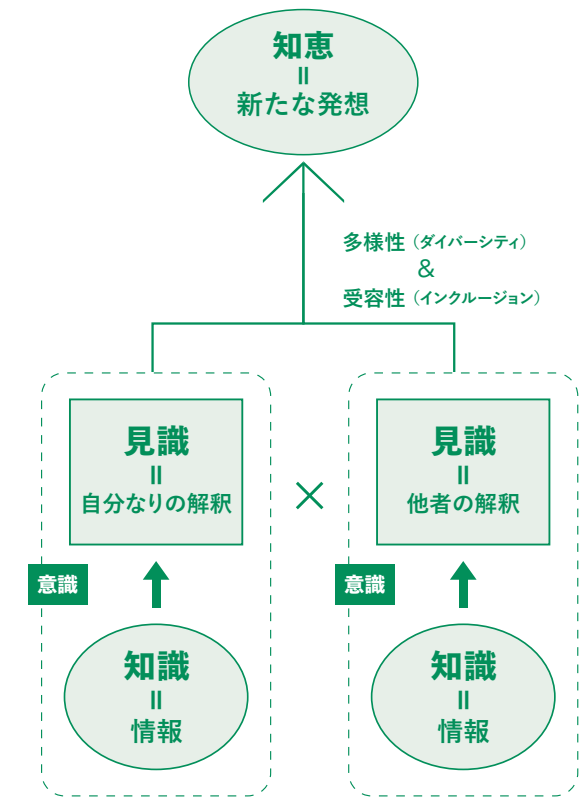
欧米に追いつけ追いこせの時代であれば、専門家の言動や海外の動き、すなわち最先端の「知識(情報)」を有していることが優先された。しかし現代においては、インターネットで検索すれば情報など即座に得られる。最も大事なものは「知恵」、言い換えれば「新たな発想」であるべきだと考える。もちろん、知識がなければ浅かな知恵にしかならず、かといって知識だけが豊富にあっても知恵に結びつくことはない。では、知識と知恵のあいだのミッシングリンクを結ぶものは、いったい何だろうか。

現代社会においては、知識(情報)はそれだけでは意味をあまりもたない(なくてもいいという意味ではない)。知識は、そこからさらに考えて、調べて、思考を重ねて、

■図1:虫の目、鳥の目、魚の目



■ 図2: 知識と知恵の大きな隔たり



という作業を積み重ねることによって、自分なりの解釈を付加させなければならぬ。幅広い「知識」を高い「意識」でもって自分なりの「見識」にまで昇華させてこそ、初めて有益になる。ここでいう「見識」とは、あくまでその人が考えた仮説にしか過ぎない。当然のことながら、専門家の意見もキチンと押さえておく必要がある。しかし、そうした既知の情報を用いるだけではなく、そこからさらに先を自分なりに考えるというプロセスを踏むことが、

より大切だろう。ただ、そこまでしても新たな発想にたどり着けるとは限らない。先の学生がユニークな意見にたどり着いたのは、他の学生の発言を聞き、解釈を膨らませたからにはかならない。つまり、自分の解釈と他者の解釈が接した際、それらのあいだで化学反応が起こり、新たな発想が生み出されたわけだ。知恵とは、このような偶発性で生まれることが多いのではないだろうか。

ダイバーシティ&インクルージョンについての考察
自分なりの解釈と他者の解釈が偶発的に出会い、化学反応を起こした結果、新たな発想が喚起される。この化学反応を生み出す状況を端的に表しているのが、「ダイバーシティ&インクルージョン」ではないだろうか。
ダイバーシティとは、女性の登用と曲解されているケースもあるが、本来の意味はもっと広い。多様性を意味する言葉で、さまざまな観点の属性をもつ多種多様な人材が組織の中に所属している状態を指す。

一方で、多様な意見と接したとしても、それを受け入れる度量と積極性がなければ、何も変わらない。そこで登場するのが、インクルージョンである。インクルージョンとは包含性を意味するが、多様な人材の個々の特性を活かされている状態を指している。
日本社会は元来、同一民族・同一言語の割合が高く、企業組織においては男性優位の形態が長く続いてきた。右肩上がりの成長時代

においては、すでに顕在化している課題に対して単一の解決策を示せばよかった。ここでは、同質化した組織のほうがより早く解に到達できたのかもしれない。別の言い方をすれば、少数意見を切り捨ててきた一面はあるだろう。

しかし、グローバル化がすすみ、情報が即座に世界中を駆け巡る現代社会では、多様性すなわち個人が認められる時代になっている。新たな提案に対して過去の前例や有識者の意見を求める昭和的な古い感覚では、これからの時代を生き抜くことは難しいだろう。イケイケドンドンの成長時代から、ある程度飽和した成熟社会になった現代においては、個人を尊重するとともに、多様な意見から生まれる豊かな発想が求められている。その基本となるのが、ダイバーシティ&インクルージョンである。

ダイバーシティを私なりの言葉で言い換えると、「いろいろな意見を身近におくこと」である。特に大学生など若い人たちは、日常から情報のシャワーを浴びていることから、「議論の場」で貴重な意見を発することも多くある。そ

して、インクルージョンは「いろいろな意見を受け入れること」だ。もちろん、他者の意見を求めるだけでなく、自分自身もまた他者から意見を求められる存在になる必要がある。つまり、ダイバーシティ&インクルージョンの理想的な状態になるには、「いろいろな意見を出す自分になること」が重要だ。

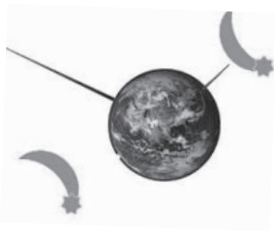
**好奇心のツノを
たくさん持とう！**

では、「いろいろな意見を出す自分」になるにはどうすればよいだろうか。そこにはやはり、「好奇心」が求められる。ベンチャービジネスで成功した人にその成功

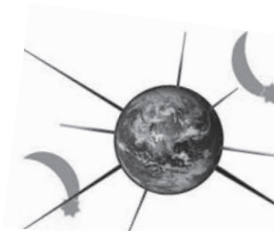
の秘訣を伺った際、「好奇心のツノを育てることだ」と言われたことがある。成功者に共通することは、誰もが好奇心旺盛であり、行動力が誰よりもあるというのは皆さんも了解されることだろう。その好奇心が、チャンスをつかむのだという。
そのイメージをイラスト化したのが図3である。自分自身を地球とし、チャンスは宇宙空間を飛び回る彗星として表した。彗星は地球の周辺を飛び回っているだけで、地球に衝突することはまずない。この彗星がぶつかるのを待つのではなく、自発的に取り込むためのものが、好奇心のツノである。ツノは地球に近づいてきた彗星を絡ませ、自らのもとへと引き寄せる。

元となることは多くあるだろう。私の経験をもとに、多様な意見をもつ人間を育み、豊かな「議論の場」をつくる要因を探ってみたつもりである。今回のレポートがその一助となれば幸いである。

■ 図3: 好奇心のツノ



一般の人



成功した人

また、ここでいうツノは分野を固定しない方が望ましい。「自動車エンジンの開発者が、ダーウィンの進化論に刺激された」ように、越境した分野の話題が化学反応の

エネルギー・文化研究所のホームページで連載しているコラム

エネルギーよもやま話 **連載期間** 2022年4月～2023年10月

歴史に学ぶエネルギー **連載期間** 2023年11月～毎週連載



<https://www.og-cel.jp/column/index.html>